

特集 リスニングからの導入

リスニングによる 言語材料の導入

根岸雅史

(東京外国語大学)

1. 言語材料の導入

中学の英語教育では、「聞くこと」「話すこと」を中心とした指導が行われており、言語材料の導入をリスニングにより行うのは、極めて自然なことに思われる。新教材の導入を考えた場合、規則の説明から入り、その規則の実例を示していく方法と、実例をたくさん示して、そこから規則を導いていく方法とが考えられる。前者を「演繹法」といい、後者を「帰納法」という。「演繹法」では、生徒に手っ取り早く規則を与えられるが、その規則はレディー・メイドである。それに対して、「帰納法」では、学習者はいくつもの実例の中から自ら規則を発見していくことになる。新教材の導入にあたり、演繹法をとるか、帰納法をとるかは、一般的には、この規則の発見のプロセスに価値を見いだすかにかかっているが、自然な言語習得においては、まさにこの発見のプロセスこそが重要かつ不可欠な一段階なのである。だとすれば、新出の言語材料の導入にあたっては、リスニングにより帰納的に導入するのが望ましいと考えられる。しかも、こうすれば、その後のスピーキングへの展開もスムーズに行うことができる。

2. リスニングによる言語材料の導入の実際

では、リスニングによって言語材料を導入するとは具体的にどういうことであろうか。言語材料の導入であるから、新しい言語材料がリスニングに入ってくることになる。言語材料といった場合、広くは語彙や表現なども含まれるわけであるが、以下では、言語材料を「文法事項」にしぼって議論する。新しい文法事項を英語の音声を使って帰納的に導入する場合は、新しい文法事項が持つ言語的な機能を生徒

が推察できるようなお膳立てをしておかなければならない。つまり、教師が絵や実演などを使って新出文法事項を含んだ文を導入することで、生徒が新しい文法事項の機能を推測することができるようにしておくのである。この場合、導入する文で用いる単語は、すべて生徒が知っている単語でなければならない。

ここでは、比較級の導入について具体的に考えてみよう。導入する新出文法事項が、形容詞に -er をつけて作る比較級を含んだ文だとすると、次のような文を導入に用いることになる。

My pencil is longer than yours.

おそらく、この文の導入にあたっては、長い鉛筆と短い鉛筆を別々に示しながら、

My pencil is long.

Your pencil is short.

と言った後に、2本の鉛筆の長さを比べながら、

My pencil is longer than yours.

と導入することになるのではないか。

もちろん、My pencil is long. の long は「有標 (marked)」であり、My pencil is longer than yours. の longer は「無標 (unmarked)」である。つまり、無標の longer を使っている場合は、絶対的に長いものでなくても、「相対的に」長ければよいのである。したがって、この点にこだわるのであれば、定規を使いながら、それぞれの鉛筆の長さを確認して、

My pencil is 10 cm long.
Your pencil is 8 cm long.

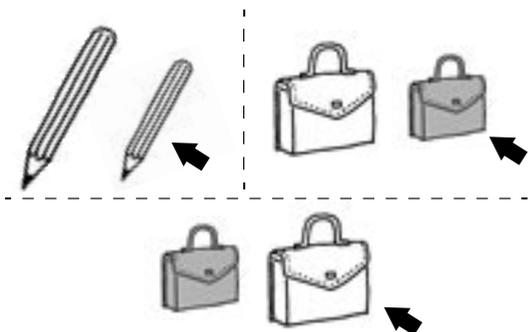
と言った後に、2本の鉛筆の長さを比べながら、

My pencil is longer than yours.

というように導入することになるだろう。

いずれの導入法にしても、具体的に2つのものが比較されていて、どちらが長いかは生徒はわかっている状態である。しかも、ここで使われている単語はすべて既習の単語であるとするならば、longer than ... の意味を推測することができるはずである。

このような導入が済んだところで、理解の確認を行う必要がある。例えば、次のような絵を用意しておいて、英語を聞きながら、どの絵のことを言っているか確認させるのである。絵は、次のようなものである。



これらの絵を見ながら、次のような英語を聞いて、その内容に合った絵を探させるのである。

My pencil is shorter than yours.

My bag is larger than yours.

My bag is smaller than yours.

このようなプロセスを経ることで、生徒は2つのものを比較するときには、形容詞に-erをつけるということ、何と比べるかを示すときには、thanをつけるということなどを発見していくだろう。

3. 型の練習への展開

こうして音声で導入されていると、話す活動への

移行もスムーズに行うことができる。今度は、始めの鉛筆2本の比較を行いながら、

Teacher: My pencil is longer than yours. Repeat.

と言って、生徒に繰り返させる。そして、3つの絵を見ながら、次のようなキューを出して文を言わせていくのである。

Teacher: pencil ... short

Students: My pencil is shorter than yours.

Teacher: My pencil is shorter than yours.

Students: My pencil is shorter than yours.

Teacher: bag ... small

Students: My bag is smaller than yours.

Teacher: My bag is smaller than yours.

Students: My bag is smaller than yours.

Teacher: bag ... large

Students: My bag is larger than yours.

Teacher: My bag is larger than yours.

Students: My bag is larger than yours.

4. 「素振り」を終えたら

ここまで来れば、新しい文法事項についての「型」の訓練は終わりである。このような訓練は野球やテニスで言えば「素振り」のようなものである。この段階の自動化を終えて、初めて「生きた球」を打つ練習に入れるのである。こうなれば、「意味」に焦点を置いて、インタラクションを行ったり、自己表現を行ったりする準備ができていのである。

最近では、コミュニケーション活動が奨励されるせいか、この「型」の練習の段階を充分経ないままに、導入からいきなりコミュニケーション活動に入る授業をよく見かける。しかし、その多くは時期尚早で、実際に使おうとして生徒がつまづいているのである。自分のバットやラケットをきちんとコントロールするという「基礎・基本」が身につけて初めて、生きた球を打つ楽しみが得られるのである。